

軍隊日記より

硫黄島戦記

金田八郎

死亡賜金

二五五円

葬祭料

四五円

陸軍大臣

一五円

参謀総長

一五円

教育総監

一五円

軍司令官

一二円

師団長

一〇円

総隊長

五円

合計

三七二円

これは昭和二十年十二月

硫黄島の玉砕により、私が戦死したとの通知があり

高家村に於いて、村葬をして戴いたときの国からの賜金です

私の人生の中で、戦争を忘れることはできません

昭和十年一月十日入隊

昭和十一年十一月退役

昭和十二年七月からの支那事変への出征

昭和十九年二月からの大東亜戦争への出征です

思い起こしてみますと

昭和十二年二月に大分四十七総隊に、四十五人の中から三人が合格して、入隊しました
その当時は日本国が、だんだん軍国主義を強めている時代で

村民が皆で祝福してくれました

金田八郎さんへと

染め抜きの旗を立てて、駅まで盛大に見送ってくれました

支那出征の時は

高家神社で村長の司会で、健康祈願祭までして送り出してくれました

私たち兵士は

御国のため

村民のためと思って

我が命もかえりみず、戦いました

食べる物もなく

飲む水もなく

木の皮を食べ

草を食べ

雨水を飲み

泥水を飲み

毎日毎日たくさんの方が死んでいきました

長い長い苦しみの連続でした

つらいつらい戦いの日々でした

そして負傷して終戦です

帰郷してみると

敗戦国日本は、国民の愛国心はどこえやら

戦争は私達兵士がやったように、白い目で見られます

村役場に行っても、部落の人達も、私達復員兵をまるで罪人扱いです

僕達兵士が、妻子を残して出征するときは

後は心配するな

銃後は守るから

心おきなく御国のために戦って下さい

と送りだしてくれたのに

農地は出征している間は部落の人達が分けて耕作して

帰って来たら返すと約束していながら

農地法の改正で

返さなくてもよいと村長、農地委員会までもが言います

私のように農業の家庭は、農地を取り上げられると哀れな生活です

村の役人たちはお米のご飯を食べております

私にも会社から働かないかと口がかりますが

私は負傷して体が不自由で、思うような動きができません

会社に勤めても、長くは勤められないと思い農業を続ける決心をしました

一町四反あまりあった田圃も、戦争中に分散して返してもらえず大変困りました

残された五反ほどの田圃では、生活は大変です

それでもぼつぼつ田圃を買って

一人前の農家になることができました

家族の皆が大変だったのです

私も負傷していることで、昭和三十年から三回年金の申告を行いました

が戦後の認可はありませんでした

あの支那事変

大東亜戦争

そして戦後

今改めて振り返ってみますと

家族と離れて

毎日毎日死を掛けた

八年間もの戦いの日々

この間、母を、子供を、稼業を、女となり、男となって守ってくれた妻
このような苦しみは何だったのか

誰のためのものだったのか

分からなくなってきました

戦場での痛ましさを思いますと

当時を思い起こしたり

書き残すことは

身を切られるよりもつらいことでありますが

今となっては、あの忌まわしい戦争を皆があまりにも知らなさすぎます

自分の気持ちを整理するためにも

詳しくは思い出しませんが、ここに記述致します

昭和十九年

二月二日

二回目の召集令状がくる

この度の召集は、長男[]三才、長女[]一才と妻子がいる、後に思いが残りますでもこの時代の人には、御国の為なれば、家族を犠牲にして、死ぬ覚悟で出征します

二月四日

今日、西部第十六部隊に入隊のため、夜八時の列車で熊本に向かう

小倉駅で、列車乗り換えのためプラットホームに下車したところ

丁度大東の兄に会って、激励を受けて列車に乗り込む

熊本に向かう列車の中で、空襲警報がある

列車は一時間余の延着で熊本駅に着く

内地での空襲など思ってもおりませんでした

ただの一度も報道はなく、聞いたこともありませんでした

軍部の報道には、事実とは大きな差があります

昨年末、大東亜戦争に突入してから、戦局は不利と思っておりま
す
国民を偽り続けている軍部は間違っております

二月五日

今日、西部第十六部隊に入隊する（元の第二三総隊です）

大分、熊本、宮崎、鹿児島各総隊より一ヶ中隊づつ、四ヶ中隊で

独立大隊、鳥井原部隊が編成されました

大分は岩本勝中隊です

入隊してから、まず大隊軍医花園中尉の健康診断を受ける

僕は胃潰瘍なので、除隊して帰郷することを申し出るが

今度は沖繩の石垣島に行くので、島に着くと楽だからと、一緒に行くように進められる

除隊しても、また招集がくると言われて、入隊をする

岩本中隊第五分隊に移籍する

岩本中隊には名前を置くだけで

大隊の副官、稲毛中尉の下で命令を伝達する事が任務です

中隊の兵士は、縄梯子等を使って、上下船の訓練を毎日毎日行っております

中隊内に独立した二二部隊があります

そこには支那事変当時の戦友が、沢山招集されて来ています

僕が支那事変の時に可愛がっていたので

毎日食事の時に呼びに来て、ゼンザイやパンなどを御馳走してくれました

毎日が暇なので、生け垣の所に行つてよく寝転んで居りました

面会に来た人が沢山うろうろしており、僕に声をかけてきます

二、三日泊まって、毎日面会を申し込んでいるが許可してもらえず、面会ができないでいるとの由

僕が同行して中隊に行き、面会ができるように許可をもらってあげる
大変喜びます、毎日二、三人くらい面会をさせてあげました
お札にオハギや菓子、タバコ等を貰うので、中隊の兵隊たちに分けてやると
食事が少ないので大変喜びます、一挙兩得です
僕は大隊命令で、銃につけるブイの竹を切り出すようになり
毎日十人ほど引率して、竹を切りに白川の上流に行きます
面会をする兵隊がいるときは、農家にて面会をさせます
竹を切って民家で昼食をしてから、夕方まで休んで帰るので、息抜きができて皆喜んでくれます
出発の日が近づく

三月一日

今日は熊本駅から列車で鹿児島に移動する
お昼まで列車が来ない、午後列車に乗り込む
翌朝鹿児島の大隊本部に着くとこのまま待機とのこと
鹿児島港での乗船の予定が、まだどうなるか分からないとのこと
正午頃列車は門司方面に向かって出発する
東京の品川駅に着く
岩本中隊は、旧藩主細川家の下屋敷に宿泊する、回りは土塀で囲われており
前門、裏門に歩哨が立って、兵士は一步も外へ出られません
僕は毎日大隊本部に連絡に行きます

戦友が一度東京の町が見たいと言います

僕は十名ほど引率して大隊本部に行き、稲毛副官に東京見物が出来るようにお願いして僕の用が終わり次第東京見物に出掛けました

東宮御所を見たり、泉岳寺に行って四十七士のお墓などにお参りしました歩いて町を見物して夕方帰隊しました、皆大変喜びました

三月九日

早朝、兵隊十五人を引率して品川港に行く

日昌丸に荷物の積み込みをして、大隊及び中隊の乗船室を確保して、夕方帰隊する

三月十日

東京湾に輸送船集結する、正午頃乗船する

僕は、乗船するとすぐ船上の警備に立つ

東京に着いてから、お天気が良く毎日小春日和が続いていましたが

午後から大変寒くなり、夕方から雪が降り出しました

夜中頃までに十センチ程積もり、一面真っ白になりました

夏服の兵士は大変です、シートの中に潜り込んで寒い一夜を過ごしました

朝、警備を交代して船室に入る、敷ゴザ（三尺×六尺）一枚に六人です

背嚢を置くと人が座るところはありません

僕は、どこか良い場所はないかと船倉を見回すと

お米を積んでいる上が空いています

僕は炊事場までお米を運ぶと言って、米倉に入れてもらいゆっくりできました、一分隊十五人です
東京湾には、米国潜水艦が潜水している由、警備が厳重です、僕たちは大変驚きました

三月十一日

東京湾を出港して南下を始める

船団は七船です

僕等一船は硫黄島に行き、他の六船はサイパン島に行くそうです

太平洋に出てから、僕は船のマストに上り、潜水艦の見張りにつきました

海軍は、駆逐艦一隻で警備しております

海が荒れるので、僕等陸軍は船酔いがひどくて、警備を誰も交代に来てくれません
体を紐で結んで、昼夜見張りをしました

父島港に入港して一泊する

港は回りが高い山で、海岸に少し平地があり民家が建っています、良港のようです

三月十二日

今日も港を出て南下をする、母島が見える、母島は平地が広いようです

途中から船団と別れて、硫黄島に向かう

一時間程した時大音響が起る

水柱の立つのが見える、輸送船一隻が沈んだそうです

戦友の多くが死亡したでしょう、一隻に五千人は乗船しております

僕は運よく無事に硫黄島に着きました

僕がマストの上から島を見ると、何と小さい島でしょう、回りの海岸線が見えます
後で分かったことです

島の周囲は約二八キロメートル

幅は広いところで五キロメートル、狭いところでは三キロメートルとのことです
僕は船上から島を見たとき、敵の攻撃を受けたら、玉碎しかないと思いました

上陸して西海岸の警備に着く

中隊は上陸してから、飛行場、陣地、自分たちが入る壕掘りと、全員が休む暇もありません
ガジュマルの木の下に携帯用天幕（一メートル×二メートル）を敷いて、毛布一枚で寝ますが
緯度は台湾とほぼ同じですが、火山島ですから日中は灼熱地獄です

夜は海風が吹いて寒くて眠れません

壕ができてからは、地熱があり夜は暖かくて助かりました

困ったのは水がないことです

兵士は、五〇〇メートルも先の海岸に行つて、お米を海水で洗つて来ますが

真水がなくてご飯が炊けないので、盗水をします

毎日本スコールが一、二回くるので助かります

テントを張って雨水を取水するのですが、これが毎日の重労働です

飲み水も不足しています

貯水設備がないので、島民の水を盗みに行ってはトラブルが起きます、大変です

僕が大隊本部に行く

稲毛副官が、真水確保の為に何か良い方法はないかと、会議をしたが、良い結論も出ず

盗水トラブルは起るしで大変困っている

金田君何か良い方法はないかと聞きます

僕は、内地では海岸部落でも井戸水を使用しているのを思い出し

井戸を掘ったらどうかと進言すると

将校達が、砂地で駄目だと申しますので

僕なら掘ってみる、議論ばかりしていても水は出て来ないと言いますと

副官は、金田君の言うとうりだ、掘ってみてくれと言います

工兵隊に協力してもらい、工兵隊に径二メートルの井戸土管を作らせ

波打ち際より一五〇メートル程の内地に土管を置き、中の砂を出して一ケずつ掘り下げていきます

砂地なので工事は早く、二十四、五メートル程は四、五日で掘り下げましたが

地熱が高くなり中の作業が二十分とはできません

だんだんと地熱が高くなり、後は四、五分で交代です

二斗樽をロープにつけて、滑車を使って五人で引き上げます

二十人が交代で掘り下げます

稲毛副官や、将校達が見に来て感心しておりました

土管を三十本程入れると、水深が二メートル程になると塩分はほとんどなくなり、真水に近いので井戸水を昼夜なく使用できるようになり、各隊が大変喜んでくれました

僕は、毎日本部に行つて、各中隊から五名、計二十人に通信教育を致します

島内の状況はといいますと

東京都下硫黄島村です

駐在所、郵便局、小学校もあります

産業は、硫黄、コカイン、黒砂糖を産出します

住民は二千人程で、常食はサツマイモ、魚の干し物、野菜です

魚は沢山獲れ、果物は、バナナ、パイヤ、ヤシ等と熱帯果物は何でもあります

南国の豊かな恵みがある、暮らしやすいところのようです

海岸には、温泉も湧き出て、平和そのものです

でもこの戦争で

陸軍二万五千人、海軍五千人が駐留するようになります

平地に、第一飛行場、第二飛行場を作り、各地に陣地を造ります

山はみな陣地で、地下には無数の壕を掘ります

最初は地下十メートル、次に二十メートル、次に三十メートルと三段の深さまで掘りましたので畑も何も無くなり、住民の男は皆労働にかりだされます、村のリズムは狂ってしまいました

四月頃になると爆撃が始まりました

住民の女性、子供、老人は内地に送還し、男子は残されました（十五歳～六十歳まで）戦争とは悲しい事です

米軍の潜水艦が浮上して砲撃を始めます、一キロメートル程の沖合からです
応戦しないので、看板の上で米兵が手を振っているのが見えます

制海権は米軍に移って、日本の海軍は一隻も来られません

日本の輸送船が、北硫黄島方面から南下して来ると

米潜水艦が攻撃して撃沈してしまいますので、一隻も硫黄島まで着きません

食料が逼迫して来ました

兵隊の食事は飯盒の蓋一杯が一回の食事です、おかずは梅干し一個です

それでも毎日毎日朝早くから飛行場作り、土豪掘り、トロッコ押し、タコツキと続きます
掘った土は袋に入れて、肩にかついで三十メートルも積み上げます

重労働です、若い元気な兵隊達にも、栄養失調者が続出しました

中隊で二、三十人も栄養失調者が出だしますと、一人、また一人と死んでいきます

病人にはオモユを少しづつ飲ませるだけです

蓋一杯のご飯は、飯盒蓋の中で一と口か二た口程の、コロコロになっております

腹がすき、使役に出れる兵士が少なくなります

僕は食事当番に就いたときは、軟らかいご飯を炊いて、病人に食べさせてやりました

花園軍医に診察してもらうために、診療所に毎日同行しました

その時軍医にお願いして、大分市の成松君、杵築市の伊藤君の二人を内地に送還してもらいました
この頃は戦闘も激化して、死しても内地送還はしないという時です
よく送還できたものだと思います

B―二十九の爆撃があるようになりました

旅団指令部から、各隊と電話網を張るように命令が来たと、稲毛副官から連絡がありました
僕は通信兵二十名を引率して元山の旅団に行く

通信隊長で、旅団副官の小園少佐が出てこられて、金田さんではないかと言われて

この時はじめて通信隊長で旅団副官が、東高家の小園二三夫さんと知りました
各隊に延線する地図をもらい、十日ほどで作業を終えました

毎日旅団で、小園副官の接待を受けて、僕ら二十名は大変感激を致しました
波打ち際に歩哨に行った時、B―二十九の爆撃を受ける

島の手前の海の上から爆弾の投下を始め

島を通り過ぎて海の上に行っても爆弾を投下しています

二十機程での投下ですが、島全体に隙間が無いほど爆弾が投下されます
日本の戦闘機に比べたら、物凄い破壊力がある爆撃機です

僕は急いで壕に入りました

壕の横に爆弾が落ちて十メートル程の穴があき、砂で壕が埋まりました
皆無事でした、命拾いをしました

内地からは再三少年飛行兵が飛んで来ますが

飛行場に着陸できず、砂浜に不時着します

飛行機は何機も駄目になりました

少年飛行兵に聞いてみますと、飛び立つだけの教育を受けただけで

着陸の教育を受けずに飛び立って来たそうです

昭和十九年八月末頃

サイパン、テニアン島が米軍に占領されてから、飛行機の爆撃が激しくなりました

毎日毎日地上は芋畑のように掘り返されて、ガジュマル等の大木は吹っ切れてしまっています

食料がなくなり兵士達は、草を食べ、バナナ、パイナップル、ヤシの木まで削って食べています

米軍第五艦隊の航空母艦の接近で、グラマンの大空襲がありました

日本の戦闘機二十機程が向かい撃ちして、大空中戦になりました

はじめは敵機を沢山撃墜して、敵の落下傘で、上空は花が咲いたようでした

みな海に下りていきます、潜水艦が何隻も浮上してパイロットを救助します

島には一人も下りてきません

敵機は波状的に攻撃して来ます

日本機は着陸して給油することができず、燃料切れで次々と自爆していきました

飛行兵士（パイロット）は、パラシュートを持っていないのです

優秀な日本の飛行兵士は愛機と共に、次々と戦死していきます

制空権が日本軍に無くなり、米軍の思いのままの空爆です

日本からは一機も戦闘機は飛んで来ません

空襲が終わったら、西海岸の岩礁に人影が見えるので

舟を出して救出に行き、米軍のパイロットを一人連れて来ました

飛行機で父島に送ったそうです

毎日空爆が十回、二十回と日増しに多くなります、制空権を失うと惨めなものです

陸に上げられた魚と同じです、敵のなすがままです

十二月、一月ともなりますと、一日百回前後の空襲です

地上は砂岩なので、一回毎に地形が変わります

一日でも壕からでないと、自分の壕が分らなくなる程の変わりようです

ガジュマルや桑の木、パイヤ、マンゴ等、直径五十センチから百センチ程の大木が沢山あり

パイナップルやリュウゼツラン、いも類等も茂って、青々とした眺めのよい島でしたが

毎日毎日、何回も何十回もの空爆や

何回も飛行機で重油に火をつけて、空中散布する攻撃で

空から火の雨が降ります

落下した火の付いた油の塊は、岩石の上でも黒煙を上げて、いつまでも燃続けています

内地にいる時、イタリアで米軍が空中から火の雨を降らせて

兵士を燃殺したという新聞記事を読みました

実際、自分が攻撃されてみますと、島全体が黒煙に包まれて、いつ迄もいつ迄も燃え続けています
さながら生き地獄です

毎日がこのような攻撃の繰り返しで
美しかった島の草木は焼き尽くされて、焼け野原になってしまいました

僕達通信隊は、通信網の確保のため、電話線の修理をします
夜も昼も休む暇も無く、攻撃の中で命綱一本、荷造り縄（ホソビキ）を持って修理を続けます
爆撃が始まると縄を伸ばします
もし土に没したときの目印です

九月六日頃

旅団より小園副官が来て

大隊の旅団通信隊に僕の転属の申し込みがあり

大隊本部に呼び出されて行ってきましたが

大隊本部も僕が必要ということで、話し合いは着きませんでした

旅団命令で転属しました

旅団の通信兵は、要塞通信兵で電話の番だけしており、電話器の修理はできません

僕は毎日毎日電話器の組み立てです

内地から送られてきた電話器は、台数は多いが部品を三、四台に分散して入れてあり
部品を取り出して組み立てると一、二台しか完成しません

内地でも軍にせきたてられて、員数だけは揃えているが、部品が不足しています
無線機も送ってきていますが、送信機だけで、受信機が送ってきていませんで使用できません
トラックが来てもボディだけで、エンジンが無くて使用ができません
幾台も海岸に放置してあります

十二月末頃

毎日の壕掘りは、旅団指令部に向かって掘り進んでおりましたが
貫通前に上陸戦になりました

僕が外で作業中に爆撃が始まり、近くの壕に避難する、壕までは一〇メートル程でした
壕内の三差路の奥に座りました

突然横の直通壕の五十メートル程奥に、爆弾が地面を貫通して落ち爆発しました

爆風が直坑を吹き抜ける、爆風で三十人程が戦死しました

僕は失心して助け出されました

衣服は千切れて無くなり、丸裸だったそうです

目には土が一杯入り見えませんでした

診療所で目洗いを続けて、一週間程たって見えるようになりました

昭和二十年一月十日頃

僕の戦友で、対戦車砲座作りに来ていました

岩本隊の [] 氏（四日市町川島）と [] 氏（柳ヶ浦）の二人が負傷して

野戦病院に入院している事を知り、見舞いに行きました
だいぶ重症のようです

僕の分隊の [REDACTED] (福岡市) も入院しております

小園副官と病院長が実懇なのでお願いして、内地に送還することになりました
負傷して血に染まったり、土まみれの衣服を着ているので
被服倉に行つて三人分の上下服をもらい、着替えとして渡しました

三人を送還する時、小園さんと僕は硫黄島にいる
敵の上陸も間近である

戦死は目前に迫っている

硫黄島で戦死した事を家族に伝えていただき

家族の者に元気で暮らすようにと、伝言をお願いした

二月十二日頃

将校の欠員補充に來た飛行機が、十二日に遺骨と数十名の負傷者(負傷した僕の戦友三人を含む)
を乗せて内地に向かう(無事内地に着いて皆退役している)

僕が運よく助かつて帰還してみますと、僕が送還した大分の二人と後の三人共
僕の家族には伝言も伝えず、一通の便りも出しておりません

小園副官、僕の村葬にも参列してくれてはいませんでした

この人達の薄情なものには驚きました

今日も駄目、今日も駄目というのを、毎日毎日四、五日も小園副官にお願いしてやっと送還することが許されたのに

当時は敵の上陸が目前で、米軍の第五艦隊が刻一刻と北上して、島に接近しております将兵は一兵も離島させないと、命令が出ていた時です

帰還後は私も小園副官に一度も会いに行きませんでした会うのが小園副官に対して済まない気持ちで一杯です

その上彼等は、戦時中の負傷で傷病軍人になり、傷病年金を貰い喜んでおります

僕は終戦後除隊してから、傷病軍人の申請をしました但僕の方が重傷でしたのに傷病軍人に成れず

体調が悪くて死ぬまで苦勞しそうです

島では食料が二月末頃迄しかありません

米軍の第五艦隊が二月十三日に硫黄島に着きました

二百五十余隻という戦艦で島を包囲して、水際より千メートル程沖に投碇して

全艦からの砲撃が昼夜なく行われます

飛行機も空が暗くなるほど群れ、カラスのように来て、爆撃をすること五昼夜続きましたその破壊力には皆で驚きました

摺鉢山は筒状の切り立った山で、日本軍は山腹に何段にも壕を掘り、陣地を作り

山上には日章旗を立てておりましたが

今回の攻撃で山の高さは半分程になり、戦車が山に上り下りできる程までになりました

南海岸には、海軍がコンクリートで陣地を作り、水平砲をいれて上陸に備えていましたがこのコンクリートの陣地が、何個水際まで転げ出る程の、もの凄い攻撃でした島の全貌は一変しました

二月十九日

この攻撃で、米軍は、日本兵は一兵も生存していないとみたのか十九日早朝、上陸が始まりました

南海岸の砂浜一、五キロメートルの幅に、何百隻という艦艇が隙間なく並び次々と上陸をします

現在のフェリーボートと同じで、前の扉を開いて

まず戦車が何十台、何百台と上陸して、陣地を確保します

次いで歩兵が銃を肩に掛けて、タバコを吸いながらの上陸です

旅団の見張台から僕は見ていました

一隻から兵士が二百人程上陸して来ましたが、戦車、兵士ともに大変な数です

第一飛行場に向かうさまは、何百台という戦車を先頭に、後に続く兵士は何万人という数です後で分かったことですが、この時上陸した兵士は五万人だったそうです

日本軍は、飛行場に向かって陣地を造ってあります

敵兵が飛行場に集結するのを待って

一斉攻撃をかけて、敵兵を島の中央の第二飛行場に追い落とす

戦車には、決死兵で、一人の兵士が爆薬を背負って、戦車の下に飛び込んで爆破します
一人一台の特攻です

四回も上陸を繰り返した米軍は、猛烈な日本軍の反撃を受けて
何万人という戦死者を出したことでしょう

戦車も大半が使用不能になっております

日本兵と米国兵が、地上で入り乱れての戦闘をしています

米軍は、艦砲射撃も、飛行機による爆撃もできません

地上戦では日本軍のほうが有利です

夕方になってから米軍は、東海岸の四、五十メートルの断崖で、日本軍の手薄な所を
艦砲爆撃して撃破して、上陸して来ました

陣地が次々と撃破、突破されます

第二飛行場方面から、日本軍の戦車隊が出撃して

第一飛行場から向ってくる、米軍戦車隊と激突しました

日本軍の戦車は、米軍の戦車に敷き潰されていっぺんでペシャンコです
嘘みたいな本当のことです

日本の戦車は、鉄板の厚さ三十ミリです、軌道幅は四〇〇ミリ程度です

搭載砲は砲身二メートルで、砲弾も八十ミリ程です

一方米軍の戦車は、鉄板の厚みは一二〇ミリ、軌道の幅は一、〇〇〇ミリ余

砲は日本軍の野戦砲より大きく、砲身は四メートル程もあり、砲弾は一五〇ミリです

両軍が激突したら、日本軍の戦車は、紙箱のように敷き潰されてしまいました
これもフィリピンのリングエン湾での戦車戦で、日本軍の戦車は車高が低いので
米軍の戦車が日本軍の戦車に乗り上げて、横転したという報道を信じてのことです
激突したら、いっぺんで壊滅しました

五、六倍も重量の差があるので、押し潰されて当然です
信じて戦死した兵士達が可愛いそうです

ドイツがスターリンググラドまで進行したとき

ソ連の大型戦車隊が来て、ドイツの戦車を踏み潰したという話を内地で聞きました
信じられませんでした、目の前で実際に見て驚きました

旅団長や将校に報告しても、そんなことはないと言って信じてもらえませんでした

東海岸は、海軍の一部と、戦車隊、砲兵隊で守備しており、歩兵の手薄な所です

日本軍は作戦の裏を取られて、戦況は一変しました

大軍が上陸した米軍が、断然有利になりました

日本軍はあちこちで、次々と陣地を攻撃されています

あちこちの陣地から全滅の報告が旅団司令部にきます

米軍はますます有利です

二月二十一日

南方面にいた日本軍は、米軍のあまりにも激しい攻撃に、抗戦できずに地下壕に入る島の中央部にまで進出した米軍と、各地で激しい攻防戦を繰り返しています

日本兵の肉弾戦の突撃で、攻防は熾烈を極めています

日本軍がいくら肉弾戦で頑張っても、米軍の物量には勝てません次々と陣地は全滅していきます

米軍が上陸してから連絡が取れない、粟津部隊と連絡を取るようと、旅団司令部から命令を受ける

僕は隊に帰り、自分の私物、日記帳、重要なメモ等を焼却しました

昼食が終わってから、司令部から貰って来たタバコを皆と吸いながら

僕は命令を受けて今夕壕を出て、粟津部隊に伝令に行く事を話しました

今伝令に行ったならば、運よく粟津部隊に着くことができて

帰ってくることはできないでしょう

おそらくは行く途中で戦死するでしょう

君等も十日以内には、前線に出て参戦することになるであろう

僕は一足先に戦死する

勝ち目のない戦だ

覚悟をしてくれ

僕はこの島に上陸した時、島を見て、敵軍が上陸してきたら

日本軍は玉碎するしかない、と、覚悟をしていた

君たち補充兵は初めての戦だ

君達と一緒に最後の戦まで戦いたかった

でも僕達通信部隊は、最後まで通信、伝達が使命だ

僕は一足先に行く

泣かずに笑って見送ってくれと言って別れた

夕暮が迫ったので、帯剣だけ持って壕をでる

五〇〇メートル程先が二段岩、その南の先端が屏風岩

高さが一〇〇メートル程で高射砲陣地があったが、粉碎されている

海軍の戦闘指揮所もあったが、粉碎されて瓦礫の山となっている

コンクリートは二メートルもの厚みがあり、頑丈な建物だったので

砲爆撃では絶対粉碎されないと豪語していたのに、何とも無残で寂しい光景です

下は広い砂丘です

その向こうに一段高い丘があり、そこに栗津部隊の陣地があります

旅団からは三キロメートル程の距離です

広い砂丘には、日本兵、米兵の死体が累積しています

多くの米兵が行き来しております

死体の中を前進するのが一番安全と判断して、這ふく前進です

米兵が来ると死んだふりをします

銃でつつかれた事もありました

米兵の隙をみては這ふく前進です

一進一退で、昼間はいつ発見されて射殺されるか分かりませんが
首尾よく三キロメートル程を進み、二日目の夜に着きました

米軍の猛攻撃で地形が変わってしまっています

壕の入り口が分かりません

断崖のうえに立って、四方の地形をよく観察しながら眺めてみましたが
壕の入り口は見当たりません

海を見ると、米艦は照明を煌々と照らしています

東京の夜景よりも明るく見えるのには驚いて眺めておりました

その時、突然機関銃のいっせい射撃を受けました

僕の足の甲に一発当たり、貫通しました

あっと思ったときには倒れて崖から滑り落ちました

運よく止まった所が、丁度機関銃座でした

中に引き入れて貰い、旅団からの伝令だ、隊長に会いたいと言って

歩行ができないので、戦闘指令部まで連れて行って貰いました

粟津隊長に伝令書を渡す、非常に喜んでくれました

粟津隊長は小園副官と同期で

旅団に來ると通信隊に來て、会食したり、囲碁をしたりしていました

僕も小園副官に呼ばれて一緒に会食をしたり、碁を打ったりした仲で、面識がありました
すぐ軍医を呼び手当をさせ、寢室を用意してくれて休養をさせてくれました
大変良くしてくれて涙が出るほど嬉しく思いました
当番兵が食事を運んでくれます
その内中隊長が負傷して入って来たので、僕は通路におりました、負傷者が居るところです
それからは水が殆どありません、干しパンを少しずつ食べる毎日です

二月末頃

栗津隊長に呼ばれて行きますと

今夜、栗津部隊は摺鉢山に向って、総攻撃を決行する

摺鉢山を奪還したときは

星条旗を引きずり下ろして、日章旗を揚げるので

摺鉢山に日章旗が上がった時は

摺鉢山を奪還した、と旅団司令部に伝えよと命令を受ける

伝令文を受け取りました

この時、歩行できない者は皆戦死した、歩行できる負傷兵が二十名程いる

旅団に連れて行くように命令を受けました

出撃は夜十時に決行する

君は九時に出撃するようにと指令を受ける

僕が先頭に壕を出るから、後に続くようにと指示して、夜の九時に出発する

壕の出口の一〇メートル程先に米軍の陣地があり、話し声が聞こえます

這ふく前進で横を通り、屏風岩に向かって前進する

来た時と違って、広場には戦車砲、自動車、米兵が集結しております

大型トラックの荷台には、迫撃砲（長さ一メートル、直径一〇〇、一五〇ミリの筒弾を入れて、下から撃突すれば、弾が発車できる）を何百本と積んでおります

発車ボタンをひとつ押すと、一斉に砲弾が飛び出して、一〇〇、一五〇メートル四方には立錐の余地もないほど弾丸の雨が降ります

突撃した二三百人ほどの日本兵は、一回の攻撃で全滅してしまいます

屏風岩の下まで行って待っていると、次々と二〇人が来ました

これから山の中腹を進むと指示して、中腹まで登ってから横に進む

振り向いてみると、後続の二十人は上に進んでいる

下から上に何本もの電話線が延びている

上に米軍の監視陣地があるのは明白です

制止しようとしたが間に合いませんでした

この時照明弾が打ち上げられ、昼間のように明るくなりました

瞬時に上と下との米軍陣地から一斉銃撃を受ける

僕丁度も立ち上がった時で

下からの銃弾で、右腹部から脊椎の右横に貫通銃創を受けて

斜面を転げ落ちる

意識が朦朧としてきました

どれくらい時間が経ったのか

意識が戻りはっきりしてきますと

銃撃は止んでおり、見回りの米兵の声が聞こえてきます

暗くて発見されずに助かりました

僕は這って前進をして、やっと砂丘の下までたどり着きました

脚絆で胸の傷口を縛り

山を登りますが

傷がひどくて体に力がいらずに、なかなか登れません

何回目かでやっと日本兵がいる、中腹の陣地に這い上がりました

日本兵が五、六人戦車砲の横で戦死しています

僕も、傷口から流れ出た生温かい血が、腹から足の方に流れて、衣服を濡らしております

やっと壕の中に入ることができました

僕も戦友と一緒にこの壕の中で死にたいと思い、暫くじっとしていました

だんだんと意識が薄れて行く感じがします

どれくらい時間が過ぎたか

僕はハッと我に返りました

眠ってはいけない

僕は栗津部隊の最後の伝令書を持っている

旅団長に渡すまでは、通信兵としての使命がある

今後の作戦上の重大な任務であるからと思ひ

銃を拾ひ、杖にして立ち上がる

壕を出て、前方の丘陵に向かつて進む

米軍の戦車が四、五台二段岩の方に行きました

二〇メートル程先が通信隊の立て坑で、旅団の横です

必死の思いで壕にたどり着きました、体力の限界です

戦友が司令部まで連れて行ってくれました

報告をして、伝令書を渡す

敵情を聞かれたので

米軍は屏風岩の下の方場に集結していること

トラックの迫撃砲のこと

戦車が巨大なこと

二十分程前に、壕の前を敵の戦車が通ったこと等を報告しましたが

旅団長以下将校達は信じません、そんなバカなことはない、と笑っております

戦闘開始以来、外を見ていないので分からないのです

旅団の壕の上の監視は、十分交替で監視をしておりますが

監視に出た兵士で、生きている兵士は一人もいないのです

地上に出て、敵情を視察して報告する兵士は一人もいないのです

地上に出ると皆戦死してしまいます

日本軍はもう全くの無情報の状態です

何十日も壕内にだけおりますと、信用できないのも無理はありません

報告が終って、軍医の手当を受けました

手当を受けている途中に失神してしまいました

気がついたのは一週間程後でした

分隊の兵士が看病をしてくれていました

お粥の食事をしながら見ると

梅若一等兵が足を負傷しております

どうしたのかと聞くと

三月三日に小園副官は、兵士を率いて米軍陣地に突撃して全員全滅した

自分は負傷して帰って来たとのことでした

粟津部隊の事を聞くと

摺鉢山に一日早朝に日章旗を立てたが、すぐ星条旗に変わったと聞きました

夕方、旅団司令部より曹長が来て

金田軍曹は負傷兵を引率して、野戦病院に行くようにという命令を受けましたが

僕は戦線に出ると申し出て、近くにいた兵士四人と海軍二十五人を率いて

二段岩の前線に出撃しました

夜になりましたので、小園副官からもらっていた軍刀を杖につき、壕に入りました
入った壕は高い監視所があるので、立て坑になっています

下には通路抗があり、中には広場もあります、三十人が入りました

夜が明けると敵の戦車が来て、壕の入り口に砲弾を打ち込みます

壕はグラグラと揺れて、土が落下して立って歩くこともできません

上に登って見ると、戦車の上の砲塔の横に、火炎放射器を背負った兵士が乗っております
放射されると、壕の中は黒焦げになります

銃を貰い一発で米兵を射殺すると、戦車は退却しました

その夜、海軍の二十五人は逃げていなくなり、僕達五人だけになりました

食事は

麦だけのオニギリ一個

梅干し一個

水一合

が一日の食事です

本当に苛酷な戦争です

米軍が四、五人で、五〇メートル程前の稜線に機関銃を担ぎ上げて来ました

僕が銃で二、三人を射撃すると退却します

稜線の向こうには米兵がいるようです

三月十日頃

負傷した西少尉という小隊長を、四、五人の兵士が担いで壕に入って来ました
その夜のうちに兵士達は、西小隊長を残して逃げてしまったので、皆で面倒を見ました
兵士は皆負傷しています

火炎放射器で手を焼かれています者は、首から手を釣っています

今日も米軍の戦車が、火炎放射器を持った兵士を戦車の上に乗せて
火炎を放射しながら前進して来ます

火炎は一千度からの高温です、何物も焼き尽くしながら来ています

火炎放射器を持った兵隊を銃で撃ちますと、うまく当たり、戦車が火を吹き始めました
後方の歩兵達は退却しました

このようなことが何回も、何日も続いております

三月十二日

明日は壕を爆破されるような戦況です

夜の内に壕を出なければならぬ、十二日の夜である

西小隊長を連れて旅団の壕に帰ろうとしたが、大腿部を骨折しています

他の五人の兵士も負傷しております

その上立て坑ですから引き上げてやることもできません

かといって本人も一人では這い出ることもできません

西少尉は壕に残り、自決することを決心しました

明日は僕達も全員戦死することでしょう
日本軍は大半が戦死しました

三月十三日

早朝僕達は戦死した兵士達に
安らかに眠って下さい、と別れを告げて壕を出ました
後ろで拳銃の音が聞こえました

僕たちが旅団の壕に帰って見ますと

旅団長以下、歩ける者達は皆、東海岸の方面に退却して、師団に合流したとのこと
敵に向かって出撃せずに

歩けない負傷兵を何百人も壕内に残して、退却するとは
僕達は陣地死守の命令が出ているので

負傷兵同士が助け合いながら戦っているのに
腹が立って皆で泣きました

戦闘指令部に行き、残されたお米と、タバコを持って来て、携帯燃料で炊事をして
お米のご飯を腹一杯食べました、タバコも吸いました
今度出征してから始めてのことです

二、三日毎日ゆっくり眠っておりました

壕の爆破は、今日か明日かと待っております

負傷兵は、食べる物もなく、水もないので次々と自決して死んで行きます
また何日かが過ぎました

福田中尉が、工務員二十五人を連れて入壕して来ました

東京から来た十五、六才の子供で、銃も剣も何も持っておりません、素手です
福田中尉は

師団に集結するように命令があり

旅団まで行ったが旅団には誰もいない

自分は二月末に来たばかりで、西も東も分からない

師団がどこにいるのかも分からない

行動ができないので案内して貰いたい、と申し入れがありました

僕は胸と足を貫通しており、歩行も困難なのです

これ以上きつくて、つらい思いをするより

静かに死を待とうと思っていました

今一度の御奉公と思い、案内を引き受けました

東海岸を通り、北海岸の師団の壕に向かって出発しました

出発に当たり、僕は福田中尉以下全員に

僕の後ろ五十メートル程間隔をとって来るように

もし僕が撃たれたら、すぐ退却するように指示しました

僕のこの時の心境は

食べ物はない、水もない

人間の生きるのにも限界がある

最後は人肉を食うようになる

そのような餓鬼道に落ちることが恐ろしくて

一日も早く死にたいと願っておりました

四月の末頃です、二十人もいては大移動です

何日かして、東海岸の野手隊の壕に着く

福田中尉を同伴して、戦車隊の小林少佐に会う

話を聞くと、旅団は師団の後方に退いたが、退却途中に全滅したとのことです

敵が多くて師団には行かれないので

師団司令部が出撃するのでその時を待って、呼応して出撃するとのこと

小林隊の壕には千人からの兵士が集結している

海軍の壕には二千人からの兵士が集結して、出撃を待っているとのこと

僕達は野手隊の壕にいるが食料がありません

夜になると、米軍の陣地を襲撃して食料、水、銃、弾までも取って来ます

日本軍は夜の攻撃です

米軍は昼、日中に攻撃してきます

米軍の攻撃は

日本軍がいると思われる壕に

爆弾の投下

ガス弾の投入

火炎放射器で焼きます

火炎放射器は、一瞬にして一千度の炎が壕の中を吹き抜けます、何もかも焼き尽くしてしまい兵士も、立っていた人は立ったまま

座っていた人は座ったまま、黒焦げに焼かれてしまいます

僕達は壕を点々と移動して、米軍の攻撃を逃れながら、出撃命令を待ちます

出撃命令を待ちきれずに戦車隊の壕に行ってみますと

二日前火炎放射され、一瞬にして一千余人の兵隊が焼殺されたそうです

小林少佐は責任を取って海に入水自殺したそうです

曹長以下四、五人が生き残っておりました

話を聞くと

海軍の壕には、ボーリングをして穴を開け

パイプで海水とガソリンを流し込んで、火をつけたそうです

二千人余の兵士が一瞬にして、焼死したそうです

帰壕して、福田中尉と相談する

何時米軍の攻撃を受けるか分からない

僕達兵士はよいが

庸員の少年達まで道連れに、戦死させることはできない

一般市民だからと米軍を説得して、二十五人の少年を渡しました

その後この少年達がどうなったかは分かりません

全員で壕を出ても、壕に戻る兵士は数人です

戦死したり、不明になったりします

福田中尉もいつか行方不明になりました

このようなことが四、五日置きに繰り返えされます

ある時無線機を手に入れて、敵の通信を傍受する

日本の軍艦が南下中、日向沖で撃沈したとのことです

私達兵士は天長節、海軍記念日には、内地から硫黄島奪還に来ると信じておりました

何ヶ月たっても、内地からは飛行機の一機も飛んで来ません

兵士の考えが少しずつ変わりはじめています

島から脱出することを考えて、筏を作り筏で海に出て、射殺された兵士が大変多くいたそうです
海岸には、日本兵の死体が夥しく浮いていたそうです

その内、僕のいる壕にも海軍兵が十人程来て

南海岸の米軍の高速艇を奪取して、内地に帰る話が始まり皆は同意しました

僕は負傷しているので同行を断り

通信隊の壕に行つて、自分の思い出の所で静かに自決しようと決心しました
海軍の兵士達が、南海岸まで一緒に連れて行ってくれるようにと言います

僕も行こうと思つている壕の途中でもあるので、引き受けて時期を待ちます
数日後に出発して、南海岸に到着しました

断崖の上に立つて、この道を下ると、船着き場があると教えました

海軍兵達は下りて行きます

しばらくして下の方で銃撃戦が始まりました

やがて静かになる

皆戦死したのでしょう

脱出の成功を祈りましたが、駄目のようでした

僕は一人で通信隊の壕に向かい出発しました

途中壕に入り、今までの事を思い浮かべる

二月に負傷しながら、よくも今日まで生き延びることができたものだ

足はビッコを引き

呼吸が困難です

胸の貫通傷のため、何ヶ月も横になつて寝ることも出来ません、座つて寝ていました

薬はヨードチンキを塗布するだけで、巻毛絆を幾重にも巻いております

弾は助骨も貫通しております

(後日レントゲンで見たら、助骨三本を貫通していたが、骨ができて一つになっていました)

負傷してからは、いつも先頭に立って、死を望んでいたのですが

今日まで生き延びることができて、今一人になって瞑想に入っております人間は、負傷したり、病気をしたり、死を望んでも、死ぬものではないと思いました人間は生きるためには、食べ物がなくなると人肉まで食うようになりますそれまでもは生きたくない

自決を決意しました

夜、壕の外に出てみますと

米軍が、大型で見たことも無い機械を駆使して、飛行場を建設をしています今夜この壕を出ないと、明日には壕が押し潰されそうです

夜、壕を出て元山の方に向かう

空が白みだしたが入る壕が見つかりません

大石の上にあがって座り、西方の故郷に向かい合掌する

自決が少し早くなったと思い、手榴弾を出して安全ピンを抜き、横に置く最後のタバコをゆっくりと吸う

この時後方で、陸さん、陸さんと呼ぶ声がします

夢のように思っていると、また聞こえます

振り返って見ると海軍の兵士が数人おります

僕のところに来て、何事かと聞きます

入る壕が見当たらないので、これから自決するところだと言いますと近くに壕があるので、一緒に入りましょうと言ってくれます

皆と一緒に壕に入る

水と食料を分けて貰う

食べ物は一週間ほど口に入れていません

その時の味は……

涙がボロボロと出て止まりません

米軍が上陸するまでは、南方特有のスコールが毎日三十分か一時間位はありましたが

米軍の砲爆撃のせいとか、もう何カ月も雨が降りません

戦線では水不足です

日本軍に、水をくれ

と二世の日本人米兵が、日本語で叫ぶ声を何度も聞きました

日本軍は、ドラム缶に水を入れて壕に貯蔵してありますので

たまには壕内に、少し残されていることもあります

この壕内に貯蔵されている水は、僕たちが掘った井戸から汲んで来て、貯水していたものです

食料の梱包の中には、マッチ、タバコが少しづつ入っているので大助かりです

暗闇の壕内では、衣類で火縄を作り行動します

数日後、壕の入り口が爆破されて、入り口は塞がりましたが、みんな無事でした

はって通れるように穴を開けて

夕方、壕から出て久しぶりに空気を胸一杯に吸いました

皆で喜び合いました

今までのこと、今後のことを皆で話し合いました

そして海軍の兵士は師団に行き

僕は通信隊の壕に行くことになりました

僕は心の中で、早いか遅いか死ぬことになると思って居りました

皆で出発の準備をして、西海岸に向かって出発をしました

数日後、元山山麓に着いてみると

米軍の幕舎がたくさん立ち並び、鉄条網を張ってあり前進が困難です

米軍の幕舎の中を通ったりしながら前進を続ける

野手隊の陣地に着く、かつての日本軍の野砲の陣地です

日本軍が健在な時は、島の中央の大阪山の高台で

砲身を空高く突き出して、四方の海岸に睨みをきかせていた姿は、本当に頼もしいものでした

今は砲身を地上に投げだして、昔の雄大な姿は見る影もありません

敗戦の惨めな姿です、皆涙を流して見えます

夜明けも近いので、皆で砲座の下の壕に入りました

監視所の螺旋形の壕なので、地上十五メートルほどです

明るくなって見ると五、六メートルほど下に米軍の幕舎があります

話し声が手に取るように聞こえますが、何を言っているのかは分かりません

来る途中、幕舎の前の食料や水を盗んだのが悪かったのか、僕らを捜しているようです

夕方、壕の中にいるのを見つけたようです

入り口を閉鎖しだした

夕暮れになったので爆破はせずに帰りました

夜になって壕を出て、百メートルほど先にある本壕を見つけでは入りました
朝起きて見ると、前に入っていた壕は爆破されて、高台がありません
みんなで無事を喜び合いました

それから前進できる道を探して出発しました

第一飛行場の前まで来ました

近くの壕を探して入りました

ここからは二段岩陣地も近いし、通信隊の壕も近いので

夜、出発するときは別れましようと言いますと

自分達だけでは前進できないので、是非先導をしてくれと言われました

何度も断りましたが、出発の時まで先導を求められましたので、仕方なく先導をすることにしました
壕の中にいますと、午後になってから入り口の方でドカーンと大きな音がして

ガスの臭いが、僕達がいる奥の方まで漂ってきます

僕は支那事変の時、ガス教育を受けていましたので

ガス兵器だと直感して、皆と風上に行って地面を掘り

服や毛布で頭を包んで、地中に額を押し付けてガスが通過するのを待ちました

夕方少し暗くなってから皆でやっと壕の外に出て、五、六時間死んだように眠りました

やっと正気づき、皆で抱き合って喜びました

日本からガスマスクは送って来ていません

まともに吸ったら血を吐いて死亡する、窒息性のガスのようでした

窒息性ガスは、これを吸うと口、目、鼻、耳から肺が溶けてでてきそうなほどの苦痛だそうです

飛行場に出てみますと、飛行機がたくさんあります

操縦ができれば内地に帰れるのに、と話ながら飛行機の間を通りました

飛行場を通り過ぎると、そこは辰巳部隊の壕です

僕が上陸して旅団に行く前の四、五ヶ月間、壕や、陣地を造った所です

早速本部の壕に入り、何かないかと探してみましたが、何もありません

缶に水がたまり、残飯が少しあります、水は腐っております

喉が渴いておりますので皆で水を飲みましたところ、皆腹痛を起こしました

薬もありませんので、皆腹ばいになって寝ました

西海岸は地熱が高く、腹が暖まり大事に至らず一夜で回復しました

地獄地帯で地熱も高く、湿気も多いので、缶を逆さまにして蒸留水をとって飲料水にしました

夜、岩の上に出て海の方を見ますと、煌々と照明が輝き、まるで大都会のようです

東京の夜も見ましたが、その比ではありません

西海岸は、米軍が波止場として使用しているので、船の数といい、照明の明るさは格別です

海中に堤防ができて、線路を敷いて列車で物資を運搬しているようです

海岸まで降りてみて驚きました

砂浜に鉄の網を敷き、その上を車両が通ります

堤防と思っていたのは、沈没船を集めて、並べて堤防にしてあります

列車と思ったのは水陸両用の船で、海中ではスクリュウを、陸上では車輪を使って動いています

何十台と繋がったのを、夜見ると、まるで海中から列車が陸地の奥地に物資を運んでいるようです

日本軍は、地元の漁船の両舷に鉄板を立て掛けてあり

船が波止場に着くと、船と砂浜に長い橋げたを架けて

兵士一人一人が物資を肩でかついで陸揚げをします

米軍の機材の進歩しているのには大変驚きます

飛工場の建設にしても同じです

日本軍は、二人でモッコをかついで土を運び、それを固めるのは二人でタコツキです

二万五千人の兵隊が二、三ヶ月かかってやっと一本の滑走路ができます

文明は、米軍と一世紀くらいの差があるように思われます

戦争に勝てるはずがありません

周囲を偵察して見ますと

日本兵の通過、移動が分かるように、一メートル幅の軌道の戦車で軌道跡をつけてあります

十五人が一緒に移動するのは無理なので、話し合って二班に分かれて行動するようにしました

金井君が先導して一班が出発する、海岸沿いに進みました

僕達は、一日置いて出発しました

数日間前進していると、岩陰に人が一人立っています

夜間に人がおるのは日本兵と直感したので、声を掛けると、金井君です話を聞くと、昨夜は壕が見当たらず

岩の割れ目にいるところを、米軍に見えられて攻撃されて

自分一人が生き残り途方に暮れていたと、再開を大変喜びましたそれからさらに前進して砲兵隊の壕に入る

弾薬がたくさんあります

だが、よく見ると信管がありません

この頃から昼間米軍は、日系二世を連れて来て

日本は降伏した、戦争は終わったので出て来なさいと、呼びかけがあります思い出してみますと、サイパンが玉砕してから硫黄島の攻撃です

東海岸で、無線を傍受したときは

日本の戦艦数隻が横須賀港を出港

瀬戸内海を通り南下して、沖縄に向かったようでした

僕達兵士も硫黄島奪回を夢見て、日本軍の精鋭部隊の到着を待っています

その日を待ちながら、水や食料もほとんど無いのに戦っています

毎日たくさんの兵士が、次々に戦死していきます

突然僕達は、壕に爆弾を投下されて爆風で吹っ飛び、夜まで皆氣絶をしておりました
一人が気づいて、皆を呼び起こして集めました

大きな負傷者はないが、衣服が破れてしまいました
一週間ほどたっても、皮膚のマヒがなおりません

血が流れたり、小石、砂、木屑が刺さっており、ポロポロ落ちますが痛みは感じません
命拾いをしました

数日間の養生をして北の方に向かいました

夜が明け始めたので壕の中に入りました、壕の中には四、五名日本兵がおります

ここから先は警戒が厳しくて、前進できない模様です

話しをしてみると長崎の波佐見の人が一人居り、なつかしく語り合いました
話によりますと

師団司令部は、三月十七日に総攻撃を執行すると、東京大本営に無線で連絡をしましたが
大本営からは、救援に行くまで出撃を待つようにと命令があり

四月まで待ちましたが、救援隊は飛行機一機、艦船一隻も来ません

そのうち米軍の攻撃が毎日続くようになり、兵士は次々と突撃して戦死してしまい
司令部の壕内には、師団長以下将校が四十名程になりました

兵士がいないと戦争はできません

戦況では、米軍による壕の爆破も時間の問題となって来たので
師団長はじめ将校達は、第二飛行場を通り元山の海軍の大壕に移動しましたが

飛行場付近の広場で、米軍の攻撃を受けて全滅したそうです
もう何カ月も前、僕達が東海岸に居るときに

海軍の大壕では米軍の攻撃が激しく、ほとんど壊滅状態になり

海軍の師団長は壕内で自決し、壕は当番兵が爆破したと

僕達の壕に來た当番兵が話していたのを聞いております

この事は事実だと思います

米軍の毎日毎日の攻撃で、すでに通信設備は壊滅的打撃を受けており

加えて通信隊の兵士たちも次々と戦死をして、ほとんど情報交換ができなくなっております

日本軍は、敵も味方も陣地の状態も分からずに行動しているのです

水も食料も武器もないのです

米軍に見つかれば、全滅するしか抗戦することもできない状況なのです

現在私達がいる壕の周辺は、米軍の物資の集積場所です

毎日夜は屋外で映画を上映しております

皆いつ死んでもよいと覚悟を決めていますので、壕から出て米兵の後ろに座って映画を見ております

これから先は米軍の陣地が多く、警戒も厳しく皆前進できずにいるそうです

師団の壕は近いのですが、行っても司令部が健在かどうかとも分かりません

僕達はこのままじっとしていても、米軍の攻撃を受けるだけです

目的地であります司令部まで行くことにし、壕を後に出発しました

外にいる兵士に周囲の状況を聞いても、どこまでが本当か分かりません

まったく情報交換はできないのです

行ってみるしかないのです

夜になって、米軍の陣地の鉄条網に沿って前進する

米軍の警戒陣地と気づかずに突き当たると、米兵の話し声が聞こえる

僕はすぐ土塁の前に座る

後方を見ると、他の兵士たちが一〇〇メートル程後ろを進行して来ています
気が付いてくれればよいがと、祈る気持ちで見えています

が、どんどん前進して来て、ついに米軍に発見されました

突然大声を出して、機関銃で猛攻撃をしながら皆退却をしました

負傷者はいないようです

射撃が止まる

息を殺して二時間ほどじっとしていると

米兵は眠りについたようです

僕もそろそろ引き上げようと思って

小園隊長の遺品の軍刀を杖にして立ち上がり

ぼつぼつと歩き始めました

一〇〇メートルほど行った時

突然右側の陣地から手榴弾を投げられました

足元で爆発する

次々と四、五発爆発する

体が吹き飛びました

立つことができない

動くこともできない

だんだんと意識がなくなります

.....

遠くで誰かが呼んでいる声がします

呼ぶ声がだんだんと近くなります

何にかがいるようです

気が付いて見ると、僕が小便が出ると言ったそうです

便器を用意してくれています

また意識が薄れてきます

夕方、少しづつ正気に戻り始めます

ゆっくりと目を開けてみます

目が見えない

軍医（野戦医院長少佐）が飛んで来て、目薬を何回も入れたり、色々と手当をしてくれました
回りの人達から話を聞くと

今朝も診察をしてくれたそうです

今日で五日間も輸血を続けてくれたそうです

今日の夕方までに気が付かなければもうダメだから

輸血を中止すると言っていたそうです

死線をさまよっていたのです

死の一步手前で生還したのです

ぼつぼつと光を取り戻すと

意識も戻って来ました

立ち上がろうとしますが、なかなか立ち上がれません

見ると寝台に体をくくりつけられていて、両手から輸血をしてくれています

僕は正氣に戻り、あたりを見回すと

幕舎の中は、戦友の負傷者ばかりなので

日本の野戦病院かと聞くと

皆は顔を見合わせて何も語りません

その時、将校の負傷者が来て

米軍の野戦病院であることを教えてくれました

僕は、手榴弾で飛ばされた後、米軍が見回って僕を発見

心臓が少し動いていたので、収容されたそうです

軍医が、一生懸命手当をしてくれたそうです

五日間も輸血を続けてくれたそうです

私が助かったことを、大変喜んでくれているそうです

日本軍だったら戦死です

僕は一日しか眠っていなかったと思ったのですが

五日間も意識不明だったのです

やっと意識が戻り始めた頭の中で

何とも言えない気持ちがかみ上げて来ます

米国軍は人命を大切に作る国です、頭が下がります

米軍は、戦争はもう終わった

日本軍は降伏したと言っているが、定かではありません

日本兵達は運命はともに

みんなで助け合っていきましょう

そして後日、御国の為に命を捨てる時がくる

その時まで頑張るようにと、みんなが話しています

君も仲間に入りましょうと言われました

僕も、毎日毎日死を思っただけで戦っていましたが

今日まで生きていたことができませんでした

人間の死というのは

病気や負傷によって様々ですが

死をも求めたからといって

簡単に死ぬるものではありません

人間は、その人の定められた運命のみによって

生死が決まるのだと思いました

戦友達と行動を共にすることを誓いました

病院からパジャマを貰い、血と土で汚れた軍服と着替える
五日振りに食事をしようと思いますが

歯が浮いて食べられません

下顎が痛くてだめです

後でレントゲン写真を見せて貰いながら、説明を聞きますと
手榴弾が爆発したときの破片か、銃弾かは分かりませんが
前の下顎から入り

左側の下の歯のつけ根を通り

親知らずの根元で止まっていたそうです

貫通していたら、頸動脈を切断してもちろん即死です

歯は全部抜かないとダメなようです

左手から、大きい破片を三個、摘出したそうです

まだ小さい破片が二十五、六個も入っているそうです

右手にも四ヶ所、破片が残っているそうです

このため左手は完全に機能を失っています

全然動かすことができません

何を持つこともできません

左右の足の大腿部からも、破片を三個摘出したそうですが
まだ三十余りの破片が残っているそうです
足の甲も破片が貫通しています

歩くことはできません

腰にも、タバコの吸い口大の破片が五個入っているそうです

摘出すると、今より機能が悪くなり

機能の回復は見込めないとの事で、破片は残ったままになっております

胸部も破片が貫通しております

帰国後、昭和二十一年から、国立、市立の病院に行きましたが、手術はしておりません

米国の軍隊は大変秩序がよく、一人一人が忠実に職務を行っております
朝、星条旗を遥拝すると、その後は個人の人格を大変尊重してくれます

将校に会っても敬礼はしません

炊事、掃除、洗濯と分担されていますが

日本兵には何もさせません、全部米兵がやっています

日本の軍隊では、捕虜（外国人）や兵士は虫けらのような扱いを受けてきました
また、食べ物でも、下士官や兵士は、押し麦を梅干し一個で食べておりますのに
将校は、毎回米の飯と缶詰を切って食べています

米軍は、院長以下、将校も兵士も同じテーブルについて、同じ食事をします

食べた後は、一人一人が食器を片付けます

私たち日本の兵隊には想像もできません

日本の兵士はどんなに忙しい時でも、何をしている時でも
敬礼を忘れたり、口答えをすると営倉行きです（監獄です）

後で感じたことですが

これが本当の民主主義で、日本は全くの個人主義だったのだなあと思いました

何日かたってから、病院船でグアム島に送られました

乗せられたのは、負傷兵二十人程です

十日間ほど滞在しました

この間は、赤道下で毎日暑い日が続きます

毎日ニグロ族が鉄条網の向こうに遊びに来ます、皆身振り手振りで話をしております

住民は、ドイツ人、支那人の混血です

髪の毛は、黒、赤、白、ブルーと色々です

黄色人種で日本人によく似ている

犬を入れるような鉄柵のオリがあり、日本兵が一人入れられています

僕が話を聞いてみますと

戦争に負けて、戦友と島内を逃げ回るうちに食べ物がなくなり

僕達と同じように草木を食べていたが、いよいよ食べるものがなくなり

皆で話し合って、土民を殺害して食べたそうです

戦友の一人が、自分が不利にならないようにと

私が人肉を食べたと米軍に通報したのです

米軍に呼び出されて取り調べを受けました

取り調べと調査が進むうちに、密告者がいたことが判明しました

調査がこれ以上進むと、今日まで生死を共にしてきた戦友達皆に罪が及びます

皆同罪ですが、僕は皆を罪人にすることはできません

僕一人が死刑になればよいと覚悟を決めて

僕一人でやったと罪を認めました

そのためこのような有り様です、と話してくれました

僕も硫黄島でこのことを一番恐れておりました

このようなことになる前に死にたいと願っておりました

食料もない、苛酷な戦闘を毎日毎日どこの島でもしていたのです

負け戦はしたくないものです

また何日かたって病院船でハワイに送られました

真珠湾では、日本海軍が撃沈した戦艦が何隻も見られます

上陸してから、窓をふさいだバスに乗り込みました

窓から外が見えないようにしてあります

バスは一時間ほど走って、山あいのキャンプに入ります

回りに民家は見えません

隣接地にドイツ、朝鮮人のキャンプがあります

四、五日してまた病院船に乗せられました

ハワイは高い山が多く、島また島で大変景色がよいところです

氣候も温暖で、平和で住みよいところであろうと思ひながら、船上から見えておりました船は太平洋を北上しています

数日してアラスカのシアトル港に着きました

船上から見ると、十月頃というのに雪で一面銀世界です

上陸してキャンプに入りましたが

僕達は南方からの移動で、夏服一枚です

キャンプの中はストーブを炊いてありますが

雪は一尺ほども積もっています

キャンプはテント張りですから寒いこと寒いこと

毛布一枚では寒くて眠ることもできず大変です

寒いので一日中相撲を取ったりして、寒さに耐えている人達もいます

四、五日してから汽車に乗って、南下を始めました

貨物列車に客車を一、二輛繋いだものです、客車に乗り込みました

日本の負傷兵は四十人程になりました

一日走っても駅は一カ所か、二カ所です

車窓から見ていると、小さい町でも飛行場があります、滑走路が見えます

電線はみな地下ケーブルです

セスナ機で農作物の種撒き、肥料やり、消毒をしています

人家は見渡せるところにはありません

広大な農地です

その中に放牧場があり、牛が何百頭とおります、誠に夢のようです

当時見たトラクターは、日本では平成の今になっても見るのができないほど、優れたものです
自動車は、日本の自転車よりも多く、一家に二、三台もあるそうです

島で見た米軍の食料は、全部日本の現在の駅弁当のようにしてありました
駅に着くと、車内で弁当を配ってくれます

町に着いて、家の造りをみますと、店と住まいは二階より上で、一階は車倉になっています

列車はロッキ―山脈に沿って大陸を南下しております

車内ではジュースとコーヒ―がでます、日本にはまだありません

は天然の塩田地帯に來ました、真っ白な塩の中を、列車は一昼夜余りも走り続けています

三、四メートルもある塩の山を、シヨベルカーでトラックに積んでおります

製塩工場に運搬しているのでしょう

天然塩でも日本の焼いた塩より良いそうです

道路は、に舗装されています、田舎の道も、キャンプ内の通りまで舗装してあります

道路には、何キロメートルかおきに地下貯油タンクがあり、ガソリンを販売しています

蛇口があり、お金を入れると給油できるようにしています、無人販売です

飛行機は舗装している道路のどこからでも離陸したり、着陸したりしています

僕は、見るもの見るものが、まるで夢のようで、夢の世界に來ている心地でした

戦争前の日本では見たこともない、大きな希望がもてる世界がある国だと思いました

日本は五十年余りも遅れていると思ひました

戦前には、日本の天皇陛下や、多くの軍人も訪れているはずで

文化の差を見て、これでも戦争に勝てると思つたのでしょうか

不思議に思ひました

列車は毎日毎日、南下に南下を續けて、やっとミシシッピ川の河口に着きました
テキサス州の、メキシコ湾が見えるところのキャンプの幕舎に収容されました

周囲は広大な牧用地です

幕舎は一棟に三人です、病棟ではないので、毎日傷の手当に行きます

今日から始めて一カ月に一ドル支給してくれます

日用品は自分持ちで支給がありません

歯ブラシ、歯磨き粉、ノート、鉛筆などを買うと一ドルは無くなります

キリスト教書、仏教書を借りて毎日読書をします

またノートに写経したりもします

鉄条網のところに行つてみますと、農民が馬鈴薯の植え付け作業をしています

耕起幅四メートル位のトラクターで耕し

トラクに種芋を積んで植え付けをして行きます

種芋を補給する人が一緒に行つています

トラクターは見えなくなるまで遠くに行きます

それから暫くたってから歸つて来ます

一日に数ヘクタールもの植え付けをするようです

日本では想像もつかない農作業です

米国の広大な農地と、進んだ機械化には

僕達日本の農民には夢のようであり、その雄大さに目を見張るばかりです

日本のように、せいぜい一ヘクタール前後の農業では、米国のような機械化は無理です

日本の機械化と言うと

江戸時代からのセンバが足踏み脱穀機になったことと

馬耕用の鋤の改良くらいのもんです

ほとんどが人力農業ですから、何町歩もの耕作は無理でした

半月余りしてからキャンプを出発、列車で移動です

何日かしてロスアンゼルス港に到着しました

着いてからすぐ乗船したのですが、船はどこに行くのか分かりません

十日、十五日と過ぎます

どうやら太平洋の真ん中のようにです

海が荒れて我々陸軍の兵士は立っておることもできません、皆寝ています

船酔いで大変です、食事をする事ができません

何月何日か、出港してから何日目かはよく分かりません

何日も何日も船は走り続けています

やっと船が停まったので、夜になってから船上に出てみます

どこかの港です

またどこかの小島に收容されるのだと思って周囲を見ておりました
警備が厳しいので船倉におりました

夜明け方に甲板に上がって行った戦友が、あわてて降りて来て

皆に、早く甲板に上がって見なさい、富士山が見えるよと言います

皆急いで甲板に上り、口々に富士山だ、日本に帰って来たのだと言って大変喜びました
浦賀港の沖合でした

お昼頃から下船して、浦賀収容所に入りました

歩行できない兵士はタンカで病院に入院します

僕達歩ける兵士は一般宿舎に入りました

僕は傷が治っていない

やっと歩ける程度行なので

病院で治療を受けるために入院を申し込みましたが
帰りなさい、大分にも国立病院があり入院はできる

それから宇佐には飛行場があったので

飛行場と一緒に付近の民家はほとんど爆撃された

豊前善光寺駅付近ならば、人も家もどうなっているか分からない

一度早く帰ってみなさい

大分でも入院はできるからと進められて、帰郷することになりました

昭和二十一年一月二日

下船して検疫を受ける

昭和二十一年一月七日

招集解除になる

朝食後皆一緒に東京駅に向かう、東京の町も駅も空襲で焼け野が原です

一軒の家ありません

駅のプラットホームにゴザを敷いて、食べ物を売っているのには驚きました

これが日本の首都の東京駅です

戦友が、お餅を売っているので、買ってくるからお金をくれと言います

僕は軍曹でしたから、二百円の旅費をもらっておりましたので渡すと、買って来ました

買って来たのを見ると、赤と青の色がついた親指ほどの、サツマ芋の練り物です

一個十円で、二十個買って来ました、値段が高いのに驚きました

九州行きの列車を聞くと、いつになるか分からないと言います

見ると列車が停車しております

聞くと博多行きで、朝鮮人の輸送列車だそうです

僕は駅長に会って事情を説明して、一車両を解放してもらい乗り込みました

僕の横に大阪の前川君

前に添田町の木原君とその友人

その人は、千葉の姉のところに行つての帰りだそうで、お米のおにぎりを持っておりました
食事時に一個づつ御馳走になり、大変おいしくいただきました

駅の弁当は、サツマ芋かオカラです

夜九時頃に小倉駅に着きました、日豊本線の最終列車に乗車できました

豊前善光寺駅には午前一時頃到着しました

僕は体力がないので同乗していた、宮崎の門川の黒木君に手を借りて下車、荷物も下ろしてもらつた
駅員をお願いして、荷物を駅に置いて駅前食堂に行く

吉村の伯父がおりましたので食堂に入つたのですが

様子が違つていたので井上の兄の家まで行く

井上の家までは四百メートルほどあります

負傷してから長い距離歩いていないので

足は痛くなるし、息は上がるやらで、やっと思いでたどり着きました

僕の顔を見て、義兄と姉は大変驚きました

政太さんに、我が家の方に連絡をしてもらいましたが

真夜中のことでもあり、なかなか信用してもらえませんでした

やっと理解をしてもらい、母や、家内や、弟が迎えに来てくれました

やっと我が家に帰り着きました

安心してそのまま眠り込んでしまいました

目覚めてから家内に話を聞くと

昭和二十年の十二月に戦死の公報があり、高家村で村葬をしました
長男の[]が五歳で遺骨を持って、小学校の式場まで行ったと話してくれました
帰郷後は体調が悪くて、毎日寝たり起きたりの生活でした

三月も下旬になると大分暖かくなり、体力も随分と回復して来ましたので
大分県庁の中にあった軍部が消滅して、世話部ができて残務整理をしております
出頭して、復員の手続きをしました

戸籍の復記のこと

負傷のこと

駄の原に陸軍四十七総隊の病院が、国立病院として残っているの

診察に行くようにと紹介されて行きました

診察を受けたところ、傷は良くなっている

機能回復はリハビリ治療なので、自分でぼつぼつやらないと駄目です
入院してもリハビリ治療する病院は無いと言われました

昭和二十一年四月一日に戸籍を復記しました

僕の戦争はやっと終わりました

一九九五

(平成七)年

脱稿

一九九六(平成八)年十二月十六日往生

興仁院釋慶昭居士

金田八郎

享年八十三歲

晚年蓬照寺門徒總代として尽力

淨土真宗本願寺派

蓮照寺藏

第十七世釋芳壽寺記